



芸術・演劇のプロに学生がインタビュー 平田オリザさんに聞く 「美術を志す」ということ

日本を代表する劇作家・演出家であり、芸術文化観光専門職大学の学長を務める平田オリザさん。演劇を通して、国際交流や子どもたちの教育に携わってきました。そんな平田オリザさんは、美術・芸術をどんな風に捉えているのか、これから美術を志す中学生に伝えたいことは何か。美生がインタビューしました。

平田オリザ

劇作家・演出家・青年団主宰。芸術文化観光専門職大学学長。江原河畔劇場 芸術総監督。豊岡演劇祭フェスティバル・ディレクター。

自己や社会を、音や色にして 伝えられることは、とっても幸福なこと。

Q. 美術が社会に与える影響や役割について、話をお聞きしたいです。

A. 美術というのは非常に範囲が広くて、一般の人からすると、絵画とか彫刻ですね。でもデザイン、建築、映像なんかも美術の範囲です。そうすると、私たちが暮らしていて美術と無縁ってことはもうないですよ。

例えば病院をつくる時に、小児病棟は建築段階から子供が嫌がらないように設計する。ロビーにはプロの絵本作家さんがデザインに参加する。演劇の領域でいうと、ホスピタルクラウンって分かりますか？ずっと病院にビエロがいて、長期入院の子どもたちを励ましたり。そういったことも総合的に今は医療として考えるようになってきているのです。

本来は美術ってありとあらゆるところに存在する

んだけれども、空気のように日常に溶け込んだりしているんですね。だから、美術的な感覚っていうのは常に生かされるものなんじゃないかなと思います。

もう一つは、僕は絵がすごく下手なんです。歌も苦手なんです。で、絵や歌、楽器の演奏が上手い人を見ると「自分の気持ちがかんな風に絵にできたらな」とか「こんな風に音にできたらな」と、いつも思う。

そういう自己を表現するとか、社会の混沌としたものについて音や色や形や言葉にして伝えるのが、芸術のもう一つの役割です。そのことが自分できるとってことは、今はそんなに意識しないかもしれないけれども、皆さんの人生にとって、とっても幸福なことなんです。本当はそっちが一番大事。



ティーンエイジャーの時には
みんな好奇心を持っている。

Q. 私たちのような、高校生という若い段階から、美術を学ぶ意味や大切さを教えていただけますか。

A. ティーンエイジャーと言って、13歳から19歳くらいまでが、一番人間が悩むというか、自分が何者であるとか、他者との関係とかに本当に真剣に考えるんですね。年を取っても悩みはあるんだけど、色んな経験を積んじゃうから「あ、この悩みはこういう悩みね」みたいに類型化していたり、分類してしまっ、本当の意味で悩むことはできなくなって

しまう。ただ年を取ってからも、そういう悩む気持ちを忘れない人だけが芸術家になれる。

それに普段は、そんな朝から晩まで「人間とは何か」とか考えていられないから、誰かに代わってもらうんだよね。その役割を芸術家が担う。

だからティーンエイジャーの時に、人間の心とか悩みとか、そういうものを形とか色とかにできるというのは、ちょっとだけ、他の人よりも豊かな人生を送るチャンスを得られるかなと思います。

科学の規則性とアートの不規則性、 両方が大事。

Q. 美工がキーワードにしている「美術“を”学ぶから、美術“で”学ぶ」についてどう思われますか。

A. それはとても大事なことで、いま社会でも注目されていることなんです。芸術的なものの見方や発想っていうのが、最先端の科学の世界ではすごく求められている。

科学は再現可能性が重要でしょ。一つの法則を見つけたら、誰が実験しても同じ結果にならなきゃいけないんですね。

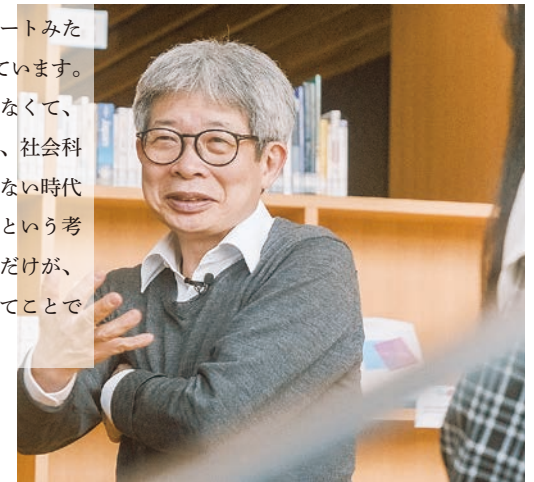
私達がやってる芸術っていうのは、極めて一回性で、一回しか起こらないですね。みんなが描く絵はさ、一回一回違っても二度と同じものは描けないし、同じものが描けてしまうのなら、意味がない。そこにアート作品の価値があるよね。オリジナリティがないとアートとは言えないので。

人間ってのは不思議なもので、理屈、科学や統

計だけではどうしても説得されなくて、その一人に起こった一回の悩みとかについて、共感をする生き物なんですね。

今、これだけ情報化社会になって、情報というのは、必ず人間の手を通して規則的に処理されているでしょう。自然というのは不規則で何が起るか分からないよね。だから自然を形にするアートみたいな不規則性が、今後ますます重要になっています。

でも、だから芸術家が偉いってわけではなくて、芸術家の側は逆に、自然科学の客観性とか、社会科学の応用性みたいなものを学ばなきゃいけない時代になってきている。これがリベラルアーツという考え方なんですね。総合的な知恵を持った人だけが、この情報化社会の中で生き抜いていけるってことで



Q. 美術・芸術を志す中学生や保護者の方へメッセージをお願いします。

A. 先にも言ったように自分の心の中の混沌とか葛藤を言葉や音にできたり、みんなのように色や形にできるってことは本当に素晴らしいことで、それは自分を救うし、多くの他人も救う尊い仕事です。

それは別に美術のプロにならなくても、半径が何メートルかの違いで、半径3メートルの人を幸せにする人もいれば、半径300キロの人を幸せにする人もいるんだけど、必ず人を幸せにする、それを僕は選ぶに値する仕事、選ぶに値する学問だと思っています。

美術を学ぶことは自分や他人を
救うことに繋がる。

◆インタビューを終えて

◆平田先生のお話を通して、アートの意義を見つめ直すことができました。このパンフレットには一部しか掲載できていませんが、約1時間、私たちの様々な質問に真摯にお答えいただきました。その中で一番心に残っているのは「いま、理解されず批判をされても、100年後1000年後に理解されるかもしれない。」という言葉です。目先の評価に縛られず自分の表現を追求すること。自分のフィールドを超え、将来の可能性を信じ、理想を追い続けるアーティストとしての道を歩んでいきたいと思います。

R5年度卒業生 日本画専攻 (左) 佐藤爽音さん (右) 北浦采芽さん

